

2021年12月19日 聖餐式説教

待望のクリスマスも、今週に迫りました。私たちはクリスマス前の四週間を降臨節と定めまして、その準備の時を過ごしてまいりましたが、本日はこの世に来られた救い主について学びます。

本日の福音書は神の使いガブリエルが主イエス様の受胎を告知した後、マリアがエリサベトの所へ行った箇所が選ばれております。ガブリエルがマリアに伝えた受胎告知、これこそ神様の救いのみ業が始められた宣言の言葉でありました。神様はマリアを通して救い主をこの世に生まれさせようとされたのでした。マリアはその器として選ばれたのです。神の前に信仰深かったエリサベトは、この世の考えを超えてマリアにもたらされた神の業を祝福したのでした。

マリアの上に与えられた神様のよりの使命、それは私たちには想像もつかないくらい困難なことでした。当時マリアはわずか十四歳、結婚前に身重になるというのは死に値する罪と考えられておりました。この神様からの使命を人々に理解してもらうことは困難でした。しかしマリアは言いました。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」。マリアはこのように、自分の命をかけて神様からの使命を負ったのです。

主イエス様の誕生は、このようなこの世的には理解されることのない、命がけの誕生であったわけです。主イエス様をこの世に来たらしめたのは、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」。マリアのこの信仰によったのでありました。エリサベトの祝福の言葉を聞いてマリアが賛美した言葉は、「マリアの賛歌」として語り継がれ、今日でも大変美しい神への賛美とされています。イスラエルのエイン・カレムにあるマリアがエリサベトを訪問した記念の教会には、このマリアの賛歌が五〇カ国語に訳されて、教会の壁を飾っているとのこと。私たちの教会でも夕の礼拝を中心に用いております。

さて主イエス様は、何故このような人々の間でも許されることのない、危険な状態の中でお生まれになったのでしょうか。神様はこのようなことではなく、主イエス様をこの世に登場させることがお出来になったはず。しかし私たちはここに神様の御心を知ることが出来ます。

主イエス様は、この世で最も蔑まれていて、人々の間で差別されたり非難されたり、苦しんでいる人、罪のゆえに神様から遠く離れている人、そういう人達に解放を告げ、自由をもたらせるためにこの世に来られたのです。もし主イエス様が王宮にお生まれになり、贅沢な暮らししか知らない家庭にお生まれになったのだとしたら、このよう人々に解放を告げることは出来なかったでしょう。苦しんでいる人々の心を本当に知り、本当の友となられるために、主イエス様はこうして誕生されたのです。主イエス様は決して裕福な家庭にお生まれになったのではありませんでした。特別な名前を付けられたのでもありませんでした。ガブリエルが命じたイエスという名前は当時最もよく用いられた名前でした。いちばんありふれた名前だったのです。ルカはこのように書きながら、主イエス様は高い方であられながら最も低く、最もふさわしくない形でお出でになられ、私たち人間のすべてを知り、愛されることを私たちに伝えているのです。ここにも主イエス様の使命が現われております。主イエス様は、私たちを救うため、罪のうちにあり、悪いことをしながらしか生きて行けない私たちに、解放を告げ、天国の道をお示しになるために私たちのところに来られました。その誕生は親も子も、危険に満ちたものでした。現に主イエス様は誕生後すぐに命を狙われることとなります。そして十字架上で死を遂げられるまで、一生危険なご生涯でありました。それはまさに私たちの救い主となられるためであり、この世でもっとも低くされている人の本当の友となられるためだったのです。このような存在が私たちのもとに与えられた、この喜びの時をご一緒に迎えましょう。

全能の神よ、み子の訪れによってわたしたちを清め、心の闇を照らしてください。主が来られるとき、主にふさわしいみ住まいを、常にわたしたちのうちに備えることができますように、父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられる主イエス・キリストによってお願いいたします。　アーメン